

大学の体育・スポーツに関する研究〔Ⅰ〕

大学新入生の高校での運動経験と大学の
スポーツに対する態度およびその関連について

西 垣 完 彦

はじめに

戦前、わが国の大学教育の目的は、要約すれば、「国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スル」（大正7年の大学令）ことにあった。そのために体育や健康の問題は、学生の個人的問題として考えられ、大学自体が正面からとり組むことはなかった。また、課外体育についてみても、とくに外来スポーツは、外人教師の指導によって早くから盛んに行なわれてはいたが、それは主として校友会の組織を通してのスポーツ活動であって、大学自体が教育活動の一環として、教育的・体育的配慮のもとに指導・管理していたとは認め難い。

このような歴史的背景をもつわが国の大学において、戦後の教育改革が、大学の教育課程の一部に保健体育を加えたことは、まさに画期的なことであったし、それはまた、身体のあるいは身体活動による教育が、大学段階においても実施されなければならないということを考えさせる点において、きわめて大きな意味をもったといえる。

20年を経た今日、保健体育科目に対するいくつかの批判や非難にもかかわらず、保健体育科目に関してなされた調査・研究は、学生の体育実技に対する態度はきわめて好意的であり¹⁾、体育実技を必修科目として支持するものは90%を越え²⁾³⁾、さらに、大学卒業生の大学体育実技に対する態度もきわめて好意的である⁴⁾ ことなどを明らかにしている。

ところで今日、大学生の健康・体力の問題は、文部省の教育白書⁵⁾ や体力・運動能力調査報告書⁶⁾ が指摘する如く必ずしも満足すべき状態ではない。その背景にはいろいろ複雑な要因があると思われるが、そのひとつとして、現在の大学入学制度によってもたらされている弊害が高校教育にダイレクトに反映して、高校生の心身の全面的発達を阻害している事実を否定できない。それは、高校から大学への移行期における発達曲線の断層的下降現象に如実に示されている（図1）。

このような実情をみると、大学において、学生の健康・体力の維持・増進をはかることはきわめて重要な問題であり、その意味においても、大学の保健体育のもつ役割は決し

て少なくないと思われる。しかし、現行の週1回の体育実技のみで、じゅうぶんな効果を期待することは困難であり、なお一層その内容を充実させなければならぬが、現状においては、その活路を課外体育に求めざるをえない。

課外体育の重要性やそのための管理組織の確立の必要性については、すでに1952年、一般体育研究委員会が大学基準委員会に報告した中間報告⁷⁾のなかで強調しているが、現在の多くの大学では、課外体育とくに運動クラブに対する指導体制は形式

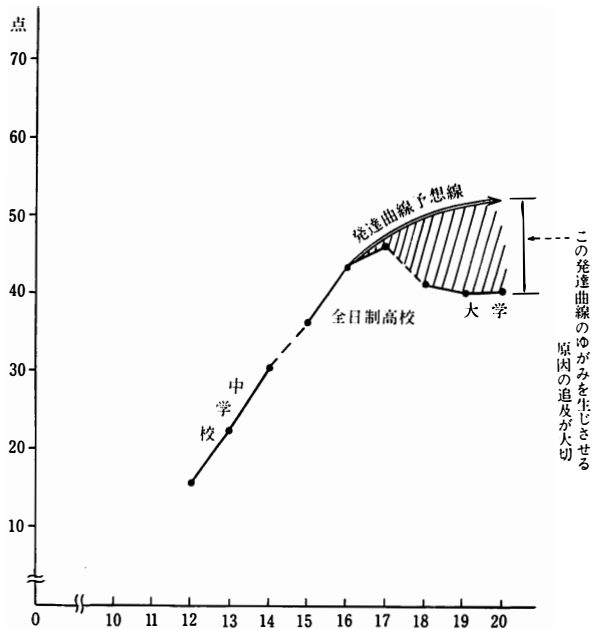
的整備に留っており、顧問教官も形骸化し、多くの問題を内包しながら、旧態依然のまま放任されているのが実情である⁸⁾。そのために、課外体育としての運動クラブ活動は日を追って盛んになってはいるが、それは少数の選手(学生)中心主義的な対外競技であって、多くの一般学生の健康・体力の維持・増進や運動欲求の充足という点においては、ほとんどその機能を果していないといつてよい。

しかし、このような課外体育の現状に対して、最近徐々ではあるが、学生の批判が生まれはじめている。それは、例えば運動クラブ員の減少に反して運動同好会員の急激な増加にみることのできる⁹⁾。そして、このような現象は、必然的に“全学生にスポーツを、”という権利意識の自覚をよびまましており、課外体育はかつての固定的状況から、ある意味では構造的変化をおこしはじめている。

いま述べたような、学生の健康・体力の現状や課外体育をめぐる新しい動きは、大学の体育・スポーツのあり方が、いま一度、総合的に検討されることを要請していると考えてよいであろう。

さて、本研究のねらいは、以上のような観点をふまえて、終局的には、大学における体育・スポーツの総合的発展をはかるための具体的な方策を見出すことにあるが、今回は、

図1 発達曲線のゆがみ



(注) 男子運動能力テストの総合得点における発達曲線の停滞・低下現象を図表化したもの

(昭和41年度体力・運動能力調査報告書P59より引用)

その手がかりを、新入生の高校における運動経験の実態と、これら運動経験と大学のスポーツに対する態度とを相互関連的に把握することに求めた。それは具体的には、現在の大学入学制度のもとで、新入生がどの程度の体育・スポーツ活動を行ってきたかを明らかにすることであり、さらに、このような運動経験が新入生の大学のスポーツに対する意欲や態度とどのような関連にあるかを究明することである。

したがって、本稿は論文というよりは、大学の体育・スポーツに関するいくつかの仮説を得るための事例研究として位置づけられるべき性格のものである。

I、研究の目的・方法

1. 研究の目的

本研究の目的は、大学新入生の高等学校における運動経験を明らかにするとともに、それら運動経験と大学でのスポーツに対する態度との相互関連を分析することによって、大学における体育・スポーツの施策をたてるための基礎資料を得ることにある。

2. 研究の方法・時期・対象

研究の目的を達成するために、つぎのような調査を行なった。

(1) 方法

質問紙法

(2) 時期

昭和42年4月20日～5月14日

(3) 対象

昭和42年度東海地区所在の大学から31国公立大学・短期大学を対象とし、各大学入学者の約15分の1を無作為に抽出して調査対象とした。

配布した調査票数は1162部、そのうち回答のあったものは1016部、回収率は87.4%であった。

なお、対象者の大学種別・性別の内訳は表1に示すとおりである。

表1 大学種別・性別調査対象数

		男	女	計
国公立大学	11	360	50	410
私立大学	12	374	88	462
公立短期大学	2	—	40	40
私立短期大学	6	32	72	104
全体	31	766	250	1016

II、調査結果と考察

1. 新入生の高校における運動経験

ここでは、新入生の高校での運動経験を、正課体育授業（以下、本文では「体育授業」という）と課外の体育・スポーツ活動から把

握するわけであるが、体育授業は必修科目であり、その学習内容や時間数は学校や性によって若干の違いはあっても学習指導要領によって拘束されている。したがって、新入生が体育授業で行なった体育・スポーツ活動の内容や時間数はほぼ同じであると考えてよい。しかし、行動が態度によって強く規定されることを考えると、体育授業に対する態度の違いは、体育授業での体育・スポーツ活動になにがしかの影響を与えているはずである。そこで、体育授業での運動経験については、これを態度の測面からアプローチする。また、課外での体育・スポーツ活動については、単に活動状況の表面的把握だけではなく、これらの活動をとりまく諸条件、とくに体育・スポーツ活動を阻害していたと思われる要因との関連において考察を試みる。

なお、表中の∧や∨は統計的に有意差のあることを示し（2つの比率の差の検定）、また、全体的な関連については、カイ自乗検定によって示し、表下にその結果を記した。

(1) 体育授業に対する態度

まず、体育授業に対する態度を愛好および意欲からみると、愛好については表2に示すとおり、全体的にみれば体育授業が好きであったものは65%である。また、表3の意欲についてみても約60%のものが積極的であり、いづれも女子よりも男子の方が高いが、これは過去の諸研究に共通にみられる現象である。

表2 高校体育授業のすききらい

		非常にすきだった	かなりすきだった	あまりすきでなかった	きらいだった	無記不明
男	766	26.5	43.1	26.0	4.3	0.1
女	250	15.6	35.6	41.6	7.2	—
全体	1016	23.8	41.2	29.8	5.0	0.1

表3 高校体育授業参加意欲

		非常に積極的であった	かなり積極的であった	あまり積極的でなかった	まったく積極的でなかった	無記不明
男	766	13.6	49.1	33.8	2.2	1.3
女	250	8.6	41.6	46.4	2.8	1.2
全体	1016	12.2	47.2	36.9	2.4	1.3

つぎに、体育授業に対する態度を態度測定によってみるが、態度を測る尺度は表4に示すような項目を内容とする12の意見に対して、「賛成」「どちらともいえない」「反対」の3反応形式で答えるものである。また、個人の態度尺度は、各意見に対して「好意的反応」+1点、「中間的反応」0点、「非好意的反応」-1点を与えて算出したものであり、尺度

表4 高校体育授業に対する態度 (-12≦score≦12)

	身体的発達		運動の発達				精神的発達				社会性の発達				体育の必要性				尺度の平均値	標準偏差																			
	1. 体育活動は日常生活に必要な体力をつくるのに役立つ	2. 体育活動は健康の保持増進に役立つ	3. 体育の時間にはいろいろな運動技術を習得し、進歩させることは時間の浪費に等しい	4. 体育の時間は全般的な準備の準備に役立つ	5. 運動技術を習得し、進歩させることは時間の浪費に等しい	6. 体育活動に参加することによって気分が軽くなる	7. 体育活動は勇気、責任、協力などの精神的資を体得するのに役立つ	8. 体育活動は共同精神の養成に役立つ	9. 体育の時間はリーダーシップの養成に役立つ	10. 体育の時間は時間の浪費に等しい	11. わたしは身体的に運動が得意な人ではないけれども体育を習得する	12. 人間のからだは体育活動をしなくてもじゅうぶんな力をもっているものだ。したがって体育の時間は必要でない	賛成	反対	どちらともいえない	賛成	反対	どちらともいえない			賛成	反対	どちらともいえない																
男	766	77	16	7	84	11	5	8	34	58	32	13	2	14	84	73	21	6	7	18	75	74	22	4	22	38	40	2	10	88	74	23	3	2	10	88	7.86	3.2	
女	250	85	10	5	87	8	5	7	28	65	59	30	11	3	15	82	76	18	6	4	14	82	90	8	2	9	27	64	3	5	92	78	16	6	1	5	94	8.95	2.7
全体	1016	78.6	14.7	6.7	85.0	10.3	4.7	7.7	32.6	69.7	56.2	31.1	11.2	2.4	14.4	83.2	73.8	20.5	5.7	6.4	17.0	76.7	78.4	3.9	18.9	35.4	45.7	2.4	8.6	89.0	75.1	21.0	3.9	1.7	8.7	89.6	8.13	3.1	

(注、意見内容は九州大学徳川幹男氏の態度測定法による)

男<女…P<0.01

の幅は-12~12である。

表に示すように、新入生の体育授業に対する個人の態度尺度の平均は8.13であり、かなり好意的である。これを各意見についてみると80%以上のものが好意的反応を示した意見は、Q2「体育活動は健康の保持・増進に役立つ」、Q5「運動技術を習得し進歩させることは時間の浪費に等しい」、Q10「体育の時間は時間の浪費に等しい」、Q12「人間のからだは体育活動をしなくてもじゅうぶんな力をもっているものだ。したがって体育の時間は必要でない」の4つである。全体的にみて、新入生の高校体育授業に対する態度は好意的であり、体育授業の効果や必要性を高く評価しているといえる。

また、個人の態度尺度を、上位群(尺度の幅、12~10、以下同じ)、中位群(9~7)、下位群(6~-12)に分類して、体育授業の愛好および参加意欲との関連をみると、表5、6に示すとおり、両者の間には有意の差がみられ、体育授業に対する態度が好意的であるものほど、授業の愛好程度も高く、参加意欲も強いことがわかる。

(2) 課外での体育・スポーツ活動

新入生の課外での体育・スポーツ活動を、まず、運動クラブ参加状況からみると表7に示すとおり、運動クラブ活動経験者は全体では約47%である。これを運動クラブ員(3年次までクラブ活動に参加していたもの)と退部員(2年次までにクラブを退部したもの)

表5 体育授業に対する態度と授業の愛好との関係

	非常にすきだった	かなりすきだった	あまりすきでなかった	きらいだった	計	標本数
上位群	31.1	45.2	21.9	1.8	100	383
中位群	22.9	41.6	31.7	3.9	100	385
下位群	14.2	34.8	39.3	11.7	100	247
計	23.8	41.3	29.9	5.0	100	1015

P < 0.01

表6 体育授業に対する態度と授業参加意欲との関係

	非常に積極的にであった	かなり積極的にであった	あまり積極的にでなかった	まったく積極的にでなかった	計	標本数
上位群	15.7	55.6	27.6	1.1	100	381
中位群	11.5	47.8	39.6	1.1	100	381
下位群	8.3	35.7	49.4	6.6	100	241
計	12.4	47.9	37.4	2.4	100	1003

P < 0.01

表7 高校運動クラブ参加状況

		410	運動クラブ経験者		非運動クラブ員
			運動クラブ員	運動クラブ退部員	
大 国 公 立 大 学		410	22.0	28.0	50.0
学 種 別	私 立 大 学	462	29.0	19.3	51.7
	公 立 短 期 大 学	144	17.4	14.6	68.0
性 別	男	766	27.9	24.3	47.8
	女	250	14.0	15.6	70.4
	全 体	1016	24.5	22.2	53.3

表8 運動クラブ員のクラブ活動参加期間

		7 ~ 12 ヶ 月	13 ~ 18 ヶ 月	19 ~ 24 ヶ 月	25 ~ 30 ヶ 月	31 ヶ 月 以 上	無 記 不 明
男	214	5.1	5.6	20.1	32.7	34.1	2.3
女	35	11.4	11.4	14.4	20.0	66.8	—
全体	249	6.0	6.4	19.3	30.9	35.3	2.0

表9 運動クラブ退部員のクラブ所属期間

		6 ヶ 月 未 満	7 ~ 12 ヶ 月	13 ~ 18 ヶ 月	19 ~ 24 ヶ 月	無 記 不 明
男	186	24.7	42.5	22.6	8.1	2.1
女	39	46.2	23.1	20.5	5.2	5.0
全体	225	28.4	39.1	22.2	7.6	2.7

に分けてみると、運動クラブ員は全体の約25%となるが、表8に示すように、高校入学と同時にクラブに参加し、3年次まで活動していたもの(25ヶ月以上)は約66%となる。これは全体の約16%(男子約19%、女子約9%)となり、実質的には運動クラブ員の数はきわめて少ないことがわかる。また、退部員についてみても表9に示すように、約68%のものが参加後1年以内で退部している。

一方、運動クラブ不参加者の校内での自由時におけるスポーツ活動をみても、表10に示すとおり75%以上のものが、ほとんど行っていないことがわかる。

ところで、高校での運動クラブ活動は特別教育活動の一分野として教育課程のなかに位置づけられ、生徒は運動・文化いずれかのクラブに参加して活動するように指導されているにもかかわらず、このような実態をどう解釈したらよいであろうか。そこでつぎに、今回の調査で得られたいくつかの資料を学業と

表10 運動クラブ不参加者の校内における自由時のスポーツ活動

		非常に よく やった	かなり やった	あまり やら なかつた	やら なかつた	無記 不明
男	366	5.5	23.2	50.3	20.8	0.2
女	176	—	11.9	41.5	44.3	2.3
全体	542	3.7	19.6	47.4	28.4	0.9

表11 運動クラブ員のクラブ活動参加程度(週当り) — 2年次 —

		2 日 以 下	3 ~ 4 日	5 日 以 上	無 記 不 明
男	214	4.2	14.5	81.3	—
女	35	2.9	17.1	80.0	—
全体	249	4.0	14.9	81.1	—

の関連に視点をおいて分析し、その解明を試みることにする。

(3) 学業と運動クラブ活動との関係

現在の高校運動クラブは、特別教育活動としてのクラブから逸脱して、競技を志向するスポーツクラブとなり、その目標は勝利至上主義中心であり、クラブ員は連日遅くまで活動に参加しているといわれる。もしそうであるなら、それは生徒の学業やクラブ参加意欲にながしかの影響を与えていることが予想される。事実、クラブ員の活動状況を見ると、表11に示すように、80%以上のものが週5日以上活動に参加しているし、学業との関係についてみても、表12、13に示すように70%近くのもの、運動クラブの学業におよぼす影響を認め、かつ、勉強時間の不足や学業成績の低下を運動クラブの欠点として指摘している。また、退部の理由をみても表14に示すように、全体に分散してはいるが学業の占める割合が高い。

一方、不参加者についてみると、表15に示すように、ここでも学業との両立困難など学

表12 運動クラブ活動と学業との関係(運動クラブ員の場合)

		勉強活動 と運動 が立って いる	勉強活動 は思わ ずよ うに入 っている	勉強活動 ができて ない	無 記 不 明
男	214	28.0	64.5	2.3	5.1
女	35	14.3	77.1	8.6	—
全体	249	26.1	66.3	3.2	4.4

表13 運動クラブ員のクラブに対する評価(わかつた点) — 重複回答 —

		自由時間 が不足 した	勉強時間 が不足 した	学業成績 が低下 した	金づかい が荒 した	生活が不 規則に なった	病気のよ うなケガ をした	特異な 意識をも った	よくな った	言っ た
男	214	60.7	45.3	32.7	11.5	4.1	16.4	9.8	7.9	6.5
女	35	82.9	48.6	61.1	4.4	5.7	—	11.4	—	5.7
全体	249	63.9	45.8	24.9	14.1	4.1	10.0	6.8	—	6.4

注：全体で5%未満およびその他の項目を除く以下、表14、15、17同じ

表14 運動クラブ退部の理由

		大学進学の ための準備 勉強	勉強が できなかった から	クラブ員 との人間 関係が	練習が きつた から	指 導法に 不満が あった から	指 導者 に不 満が あった から	病 気や ケガ をした から	運 動に 興味 を失 った から
男	186	28.5	22.6	20.4	21.5	16.7	16.7	18.3	15.6
女	39	17.9	17.9	17.9	10.3	33.3	17.9	10.3	17.9
全体	225	26.7	21.8	20.0	19.6	19.6	16.9	16.9	14.7

業に関することが、運動クラブ不参加のもっとも大きな要因になっていて、運動欲求の低さや身体的条件によるものは少ない。このことは表16にみるように、不参加者の約40%のものが「運動クラブに参加しておけばよかった」と答えていることから裏づけされる。

しかし、(2)でみたような運動クラブへの参加率の低さや自由時間での体育・スポーツ活

表15 運動クラブ不参加の理由

—重複回答—

	学業と両立しないから	他のクラブ(文化)に入っていたから	運動神経がぶいから	技術がへただから	大学受験勉強ができないから	もともと運動することがきらいだから	運動クラブのふんいきがわるいから	からだ弱いから	家族が反対したから	家事の手いなどのため	
男	366	37.4	27.3	18.3	20.5	24.9	13.9	16.7	11.5	7.1	6.0
女	176	29.5	33.0	43.2	29.0	11.4	24.4	5.7	13.6	9.1	6.3
全体	542	34.9	29.1	26.4	23.2	20.5	17.3	13.1	12.2	7.7	6.1

表16 運動クラブ不参加に対する反省

	入っておけばよかった	入らなくてよかった	どちらともいえない	わからない	
男	366	38.8	2.5	48.9	9.8
女	176	36.9	4.0	44.9	14.2
全体	542	38.2	3.0	47.6	11.3

動の不活発さを、このような運動クラブの競技志向性や選手制度化による学業の影響のみに、その原因を求めることは片手落ちであろう。なぜなら、すでに表14、15でみたように、運動クラブ退部や不参加の理由として、大学受験のための準備勉強を上げるものが多いからである。今回の調査ではこの点についてのじゅうぶんな資料を得ることはできなかったが、このことについて、影山は⁽¹⁰⁾「ある高校では、運動クラブに参加しているのは、ほとんど『非進学組』であった」と報告している。この事実は、現在の大学入試制度が、新入生の高校での体育・スポーツ活動をいちじるしく阻害していることを示している。

ところで、このような情勢のなかで、3年まで運動クラブ活動に参加していたものは、大学入学後、どのように運動クラブを評価しているであろうか。

(4) 運動クラブに対する評価

運動クラブ員であったもののクラブに対する評価(よかった点)についてみると、表17に示すように、「友だちができた」約65%、「忍耐力ができた」約50%、「協調性ができ

た」約26%、「体力がついた」約24%、「健康になった」約21%などをあげ、運動クラブが友人結合、健康の維持・増進、精神的・社会的資質の向上などの点で効果があったと評価している。恐らくこのような効果の認識が、すでに表12、13にみたように、自由時間や勉強時間の不足あるいは学業への影響を運動クラブの欠点として指摘しながらも、3年までクラブを経験したことに満足していることの精神的背景であろう。

(5) まとめ

以上の結果を要約すると、つぎのようになる。

- ① 新入生の高校体育授業に対する態度（評価）はかなり好意的であるが、授業の愛好および参加意欲からみると、40%近くのものには体育授業での体育・スポーツ活動をあまり積極的には行なっていなかったといえる。また、この傾向は女子に強くみられる。
- ② 新入生の課外での体育・スポーツ活動は、少数の運動クラブ員を除けば、あまり活発であったとはいえない。とくに、約40%のものにとっては、体育授業が唯一の運動経験の場であったことが注目される。
- ③ しかし、これは運動クラブ退部や不参加の理由からみて、運動欲求の低さや身体的条件にその原因があるのではなく、むしろ運動クラブの競技志向性と選手制度化、それに大学受験体制によってもたらされた弊害が高校生活にダイレクトに反映して、運動クラブと学業（大学受験勉強も含めて）との両立を極めて困難にし、新入生が体育・スポーツ活動をするだけの精神的・時間的余裕を阻害していたからだと思われる。
- ④ このような情勢のなかで3年まで運動クラブ活動をしていたものは、クラブが友人結合、健康の維持・増進、精神的・社会的資質の向上などの点で効果があったと評価している。

2. 新入生の大学でのスポーツに対する意欲および態度——とくに高校での運動経験との関連において——

1においては、新入生の高校での運動経験の実態を明らかにしたが、ここでは、新入生

表17 運動クラブ員のクラブに対する評価
(よかった点) —重複回答—

	友 だ ち が で き た	忍 耐 力 が つ い た	協 調 性 が で き た	体 力 が つ い た	健 康 に な っ た	積 極 性 が で き た	礼 儀 正 し く な っ た	時 間 の 使 用 が じ ょう ず に な っ た	生 活 が 規 則 正 し く な っ た	明 朗 に な っ た	生 活 が 豊 か に な っ た	
男	214	65.9	49.1	25.7	23.8	19.6	15.4	17.8	16.4	10.3	9.3	7.0
女	35	57.1	54.3	25.7	25.7	34.3	14.3	11.4	8.6	8.6	17.1	17.1
全体	249	64.7	49.8	25.7	24.1	20.5	18.1	17.3	15.7	10.0	9.2	8.4

表18 運動経験の分類方法と記号の説明

高校での運動経験をつぎの4つの内容から分類する

体育授業	a	参加意欲が「非常に積極的」または「かなり積極的」
	b	参加意欲が「あまり積極的でなかった」または「全く積極的でなかった」
運動クラブ活動	[a]	運動クラブ員
	[b]	運動クラブ退部員
	[c]	非運動クラブ員
放課後のスポーツ活動	㊸	「非常によくやった」または「かなりやった」
	㊹	「あまりやらなかった」または「全くやらなかった」
校外のスポーツ活動	(a)	「地域のスポーツクラブに入ってよくやった」または「入っていないがよかった」
	(b)	「あまりやらなかった」または「全くやらなかった」

上表にしたがって左下表の予備分類を行ない検定した結果、(1)と(2)、(3)と(4)、(5)と(6)、(7)と(8)においては、それぞれの間には有意の差が顕著でなかったため、本稿では右下表の4分類を採用した。

	予備分類	本分類			
	体育授業	運動クラブ活動	放課後のスポーツ活動	校外のスポーツ活動	
(1)	a	[a]			A..... a・[a]・a・[b] のもの
(2)	a	[b]			
(3)	a	[c]	㊸ or (a)		B..... a・[c]・㊸ or (a) のもの a・[c]・㊹ or (b)
(4)	a	[c]	㊹ or (b)		
(5)	b	[a]			C..... b・[a]・b・[b] のもの
(6)	b	[b]			
(7)	b	[c]	㊸ or (a)		D..... b・[c]・㊸ or (a) のもの b・[c]・㊹ or (b)
(8)	b	[c]	㊹ or (b)		

の大学でのスポーツに対する意欲および態度の実態を把握する。その場合、単なる全体表面的理解にとどまらず、高校での運動経験との相互関連において分析を試みる。

なお、調査結果は一般学生と体育専攻学生別および性別に集計したが、ここでは一般学生の結果についてのみ考察し、性別の結果は参考程度にとどめる。

また、運動経験の分類方法・記号の説明は表18に記した。

(1) スポーツの愛好

表19、20は、新入生のスポーツの愛好をみたものである。

まず、表19のスポーツの愛好についてみると、全体では約87%のものが、スポーツが好きと答えている。また、表20のスポーツを自分ですることの愛好についてみても、約81%のものが、自分でスポーツをするのが好きであると答え、いずれも女子よりも男子の方が

表19 スポーツの愛好

			非常に すき	かなり 好き	あまり 好きで ない	さら い
運動経験						
A	347	57.9	39.5	2.3	0.3	
B	253	49.4	47.0	2.8	0.4	
C	121	23.1	55.4	18.2	3.3	
D	274	11.3	56.2	31.0	1.5	
性別						
男	753	41.7	46.9	10.2	1.1	
女	242	29.3	51.2	18.6	0.8	
全体	995	38.7	47.9	12.3	1.0	

運動経験別 P<0.01、性別 P<0.01

表20 スポーツを自分でやることの愛好

			非常に すき	かなり 好き	あまり 好きで ない	さら い
運動経験						
A	347	56.2	41.2	2.3	0.3	
B	253	39.9	53.4	6.3	—	
C	121	16.5	53.7	28.1	1.7	
D	274	4.7	48.2	43.1	3.6	
性別						
男	753	37.2	46.7	14.9	1.1	
女	242	20.2	50.8	26.4	2.1	
全体	995	33.1	47.7	17.7	1.3	

運動経験別 P<0.01 性別 P<0.01

愛好の程度が高い。

これを運動経験との関連で見ると、全体に有意の差がみられるが、とくに、スポーツを自分ですることが好きなものが、A・Bに多く、C・Dに少ないことが注目される。A・Bに属するものは、高校体育授業に積極的に参加したものであり、C・Dに属するものは体育授業にあまり積極的でなかったものであるから、スポーツを自分でやることの愛好の程度と高校体育授業参加意欲との間には強い関連がある。また、AとBについてみた場合、とくに「非常に好き」と答えたものがAに多い。Aに属するものは、高校運動クラブ経験者であり、Bに属するものは未経験者であるので、スポーツを自分でやることの愛好程度は高校運動クラブ経験の有無とも関連があるといえる。

(2) スポーツ実施意欲とその理由

表21～23は、新入生の大学でのスポーツ実施意欲とその理由についてみたものである。

まず、表21のスポーツ実施意欲をみてみると、全体では約86%のものが、大学でスポー

表21 大学でのスポーツ実施意欲

			非常に やりたい	でき れば やり たい	あ い り や り た く な い	や り た く な い
運動経験						
A	347	45.8	49.6	4.0	0.3	
B	253	40.7	54.9	3.6	0.8	
C	121	18.2	60.3	19.0	2.5	
D	274	8.8	60.2	29.2	1.5	
性別						
男	753	34.9	52.9	11.6	0.7	
女	242	18.6	62.4	16.1	2.1	
全体	995	31.0	55.2	12.7	1.0	

運動経験別 P<0.01 性別 P<0.01

ツがしたいと答えており、女子よりも男子の方が意欲が高い。

これを運動経験との関連でみると、全体に有意の差がみられるが、とくに積極的な意欲をもつものについては、A・BとC・Dとの間に大きな差異がみられる。したがって、大学でのスポーツ実施意欲は、高校体育授業参加意欲ときわめて強い関連があるといえる。

つぎに、大学でスポーツがしたいあるいはしたくない理由についてみると、全体としてみれば、スポーツがしたい理由は、「健康を保つため」(健康志向)約58%、「気晴らしや気分転換のため」(レクリエーション志向)約46%、「運動が好きだから」(運動志向)約45%、「生活を豊かにするため」(レクリエーション志向)約37%の4つが主なものである。

これを運動経験との関連においてみると、つぎの2点が注目される。第1点は、「運動が好きだから」という理由が、A・Bに多く、C・Dに少ないことである。このことは、高校運動クラブ経験の有無とは無関係に、高校体育授業参加意欲の強かったものは、大学でスポーツがしたい理由として運動志向を上げる傾向が強いことを示している。第2点は、「健康を保つため」「気晴らしや気分転換のため」という健康志向やレクリエーション志向タイプが、B・Dに多く、A・Cに少ないことである。このことは、高校運動クラ

表22 大学でスポーツがしたい理由

—重複回答—

	運動志向	健康志向	レクリエーション志向	友人志向	技術志向	その他
	運動がすきだから	健康を保つため	気晴らしや気分転換のため	余暇をついやすため	生活を豊かにするため	友だちを得るため
						技術を習得するため
運動経験						
A	331	64.0	47.4	37.5	11.2	34.4
B	242	52.1	64.5	47.1	9.5	33.7
C	95	24.2	56.8	35.8	14.7	41.0
D	189	12.2	67.2	63.0	19.6	42.9
性別						
男	661	45.4	59.0	41.9	13.0	34.0
女	196	42.9	53.1	58.2	12.8	46.4
全体	857	44.8	57.6	45.6	12.9	36.8

表23 大学でスポーツがしたくない理由

—重複回答—

	もともと運動することが	運動神経がにぶいから	技術がへただから	スポーツをする仲間がないから	指導者がいないから	場所や施設がないから	金がかかるから	からだ弱いから	病いやケガをしているから	運動しても得るところがないから	その他
運動経験											
A	15	—	—	20.0	40.0	13.3	13.3	46.7	6.7	13.3	6.7
B	11	36.4	27.3	36.4	9.1	9.1	—	18.2	9.1	9.1	18.2
C	26	53.8	53.8	57.7	19.2	3.8	11.5	—	15.4	3.8	3.8
D	84	52.4	41.7	51.2	14.3	6.0	3.6	4.8	19.0	4.8	2.4
性別											
男	92	43.4	32.5	42.3	22.8	8.7	6.5	13.0	17.4	6.5	5.4
女	44	50.0	50.0	59.1	6.8	2.3	4.5	2.3	13.6	4.5	2.3
全体	136	45.6	38.2	47.8	17.6	6.6	5.9	9.6	16.2	5.9	4.4

ブ未経験者は、大学でスポーツがしたい理由として、この2つを上げる傾向が強いことを示している。逆に、クラブ経験者は友人志向、技術志向を上げる傾向が強い。

また、大学でスポーツがしたくない理由を、全体としてみれば、「技術がへただから」約48%、「もともと運動することがきらいだから」約46%、「運動神経がにぶいから」約

38%の3つがその大半をしめている。これらの理由は、スポーツに対する劣等意識に起因するものと考えられる。

これを運動経験との関連でみると、標本数が少ないためにじゅうぶんみることができないが、C・Dに属するもの、すなわち、高校体育授業参加意欲の低いものは、前述の3つの理由を上げる傾向がみられる。

(3) 大学運動クラブ参加意欲とその理由

表24～26は、新入生の大学運動クラブ参加意欲とその理由についてみたものである。

まず、表24の大学運動クラブ参加意欲をみると、全体では約63%のものが、運動クラブに参加したいと答えており、女子より男子の方が意欲が高い。

これを運動経験との関連でみると、全体に有意の差がみられ、A→B→C→Dになるにしたがって、大学運動クラブ参加希望者が減少している。また、A・BとC・D、A・CとB・Dの間にはいづれも有意の差がみられるが、とくに、A・BとC・Dの差が大きい。したがって、大学運動クラブ参加意欲は、高校運動クラブ経験の有無よりも高校体育

表24 大学の運動クラブ参加意欲

		非常に 入りたい	できれば 入りたい	あまり 入りたくない	入り たくない
運動経験					
A	347	28.2	49.0	15.8	4.9
B	253	21.7	45.8	25.3	5.9
C	121	15.7	38.0	24.0	19.8
D	274	5.8	37.6	32.5	23.0
性別					
男	753	20.5	45.3	22.6	10.6
女	242	14.0	38.8	27.7	16.1
全体	995	18.9	43.7	23.8	12.0

運動経験 P<0.01 性別 P<0.01

表25 大学の運動クラブに参加したい理由

—重複回答—

	運動志向 もともと運動すること がすき	健康志向 健康を保つため	レクリエーション志向 からだをしようぶにするため 気晴らしや気分転換のため	一志 余暇をついやすため	精神志向 生活を豊かにするため 精神力をつけるため	友人志向 友人を得るため 社会性を養うため	技術志向 技術をみがき力をためすため
運動経験							
A	268	53.0	33.6	33.2	17.9	6.7	24.6
B	171	50.3	34.0	33.7	42.2	6.4	26.9
C	65	20.4	46.1	32.3	21.5	15.4	24.6
D	117	11.8	42.9	46.2	37.0	10.9	28.6
性別							
男	495	41.2	39.0	41.6	21.0	8.7	22.8
女	128	39.8	36.7	18.0	31.2	7.0	38.3
全体	623	40.9	38.5	36.8	23.1	8.3	26.0

注 全体で2多以下およびその他の項目を除く。表26も同じ

表26 大学の運動クラブに参加したくない理由

—重複回答—

	もともと運動することが きらいだから	運動神経がにぶいから	技術がへただから	学業と両立しないから	文化クラブと両立しないから	時間が制約されるから	経済上困るから	からだ弱いから	病いやケガをしているから	運動クラブのふんいきが悪いから	運動しても得るところがないから
運動経験											
A	72	—	1.4	6.9	33.3	26.4	55.5	19.4	5.6	2.8	16.7
B	79	1.3	10.1	13.9	25.3	26.6	70.8	7.6	8.9	5.1	13.9
C	53	15.1	22.6	24.5	30.2	18.9	69.8	5.7	11.3	31.2	11.3
D	152	26.0	37.2	29.3	16.8	31.9	58.9	8.6	14.8	1.3	9.2
性別											
男	250	12.0	15.2	16.8	26.8	20.4	62.4	12.8	12.4	4.0	16.4
女	106	16.0	35.8	28.3	16.0	43.4	61.3	3.8	6.6	4.7	1.9
全体	356	13.2	21.3	20.2	23.6	27.2	62.1	10.1	10.7	4.2	12.1

授業参加意欲との関連が強いといえる。

つぎに、大学運動クラブに参加したいあるいは参加したくない理由についてみると、全体としてみれば、参加したい理由は、運動志向、健康志向、精神志向が比較的多いが、そのほかの理由も多く全体的に分散している。

これを運動経験との関連でみると、A・BとC・Dの間では、A・Bに運動志向が、C・Dには健康志向、レクリエーション志向が多い。また、A・CとB・Dの間では、A・Cに運動志向、友人志向、技術志向が、B・Dには、健康志向・レクリエーション志向が多い。したがって、大学運動クラブ参加の理由として、高校体育授業参加意欲の強いものは運動志向を、意欲の低いものは健康志向、レクリエーション志向を上げる傾向が強い。また、高校運動クラブ経験者は運動志向、友人志向、技術志向を、未経験者は健康志向、レクリエーション志向を上げる傾向が強いといえる。

また、大学運動クラブに参加したくない理由についてみると、運動経験や性別に関係なく、「時間が制約されるから」約62%がもっとも多い。これを高校運動クラブ経験の有無との関連でみると、経験者は、学業との両立困難、病気・ケガが、未経験者は、運動欲求の低さ、運動に対する劣等意識が、いずれも大学運動クラブに参加したくない理由として上げられる傾向がある。

表27 大学のスポーツ活動に対する態度 (−8≤score≤8)

	1. アンスである スポーツは学 生活のオ ス		2. んて時間の無職である 大学でス ポーツする な		3. どのうというこ スポーツを しなくて も別		4. スポーツ活 動は学生 生活		5. ける不可欠 の要素 スポーツは 学生生活 にお		6. 大学では スポーツな どや		7. りたいもの がやれば よい 私の生 活から スポーツ を		8. スポーツ などどう でもよい 大学は 学問の場 であり、		尺 度 の 平 均	標 準 偏 差
	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対	賛 成	どちらとも いえない 対		
A	290	56 39 △	1 9 90	16 34 50	79 19 △	2 47 42	11 35 34	31 32 △	48 20 △	2 16 82	3.72	2.76						
B	188	49 40 ▽	2 9 89	19 40 41	65 34 △	1 46 41	13 33 31	36 19 ▽	56 25 △	1 18 81	3.31	2.91						
C	104	39 45 16	3 17 80	26 35 39	67 29 △	4 34 48	18 48 28	24 14 ▽	53 33 △	9 30 61	2.21	3.29						
D	171	37 47 16	4 31 65	32 39 29	39 39 54	8 35 49	16 48 30	22 8 50	42 5 36	59 1.18	3.44							
全体	753	47.4 41.8 10.8	2.0 15.3 82.7	21.8 36.8 41.6	64.4 32.1 3.5	42.2 44.1 13.7	39.2 31.6 29.2	20.8 51.4 27.8	3.3 23.0 73.7	2.83	3.21							

(注、表27~29の意見内容は九州大学徳川幹男氏の態度測定法による)

(4) 大学のスポーツに対する態度

態度には過去の生活経験が強く反映していると考えらるなら、新入生の大学でのスポーツに対する態度は高校での運動経験と深い関連があるはずである。

そこで、最後に態度測定によって、大学のスポーツに対する態度を明らかにし、それを運動経験との関連において考察する。

態度を測る尺度は、表27～29に示すような、大学のスポーツ活動、スポーツの目的、スポーツの効果の3つの項目に含まれる8～15の意見に対して反応するものであり、反応形式および個人の態度尺度の算出方法は、前述の1-1)、高校体育授業に対する態度測定の場合と同様である。

以下、各項目別に反応の結果を男子について考察する。

まず、表27の大学のスポーツ活動に関する8つの意見に対する反応を、全体でみると、好意的反応の高い意見は(80%以上、以下同じ)、Q2「大学でスポーツをするなんて時間の無駄である」(反対82.7%)であり、逆に、好意的反応の低い意見は(30%未満、以下同じ)、Q7「私の生活からスポーツを除いたらたえられないであろう」(賛成20.8%)、Q6「大学ではスポーツなどやりたいものがやればよい」(反対29.2%)である。

表28 大学のスポーツの目的に対する態度

(-8 ≤ score ≤ 8)

	1. スポーツは気分転換のために行なうものだ		2. スポーツはヒマな時間の時間つぶしに行なうものだ		3. スポーツは健康の増進と強い体力の養成のために行なうものだ		4. スポーツは社会的な人格を養成するために、行なうものではない		5. スポーツは他の人の注目をあびたために行なうものではない		6. スポーツは名心・勝利感を満喫するために、行なうものではない		7. スポーツは自己の実力をためすために、行なうものではない		8. スポーツは就職の有利になるために行なうものではない		尺度の平均値	標準偏差									
	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対													
A	290	40	39	21	5	22	73	81	16	3	8	28	64	88	10	2	72	20	8	43	38	19	1	20	79	4.70	1.89
B	188	46	38	16	6	35	59	78	19	3	12	31	57	89	5	5	71	21	8	35	42	23	5	10	85	4.45	1.99
C	104	43	43	14	8	24	68	86	7	7	12	23	65	86	9	5	72	18	10	32	36	32	3	18	79	4.51	2.08
D	171	57	37	6	6	34	60	77	18	5	16	36	48	87	8	5	75	14	11	24	35	41	2	13	85	4.23	2.10
全体	753	45.7	39.0	15.3	6.1	28.3	65.6	80.1	15.7	4.2	11.4	29.9	58.7	88.0	8.0	4.0	72.5	18.5	9.0	35.1	37.8	27.1	1.6	15.8	82.6	4.52	1.97
		P<0.01		P<0.01		n.s		P<0.01		n.s		n.s		P<0.01		P<0.01		A>D…		P<0.01							

これを運動経験との関連で見ると、Q5「スポーツは学生生活における不可欠の要素である」を除いて、いずれの意見も有意の差がみられるが、とくに、高校体育授業参加意欲と関連の高いものは、Q1・5・6・8であり、高校運動クラブ活動経験の有無と関連の高いものは、Q3・4・7である。さらに、両者と関連の高いものはQ2である。

また、この項目に対する個人の態度尺度の平均は2.83（尺度の幅、8～-8）であり、あまり高いとはいえない。運動経験との関連では、A=B>C>Dであり、AとBの間には有意の差がみとめられないが、他のすべてのカテゴリー間には有意の差がみとめられる。したがって、これらの意見を全体的にみた場合、運動経験との関連は有意であるといえる。

つぎに、表28のスポーツの目的に関する8つの意見に対する反応を、全体で見ると、好意的反応の高い意見は、Q5「スポーツは他の人の注目をあびたいために行なうものではない」（賛成88.0%）、Q8「スポーツは進学・就職の有利になるために行なうものだ」（反対82.6%）、Q3「スポーツは健康の増進と強い体力の養成のために行なうものだ」（賛成80.1%）であり、好意的反応の低い意見はないが、それぞれの反応が、好意的、中間的、非好意的に比較的分散している意見は、Q1・7である。

これを運動経験との関連で見ると、Q1・2・4・7・8の意見で有意の差がみられる

表29 大学のスポーツ活動の効果に対する態度

		1. スポーツは適当にすれば勉強の能率が上がる		2. スポーツは健全な身体をつくらない		3. スポーツは共同精神を養成する		4. スポーツは気分をそう快にしない		5. スポーツは親友をつくる最良の手段である		6. スポーツは性質を明朗にしない		7. スポーツをやる間はいっさいの邪念がなく		8. スポーツをやっても意志は強固にならない		9. スポーツは決断力を養成する		10. スポーツは気分を軽快にする											
		賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対	賛成	どちらともいえない	反対									
A	290	75	23	2	1	6	93	87	12	1	2	13	85	50	44	6	3	22	75	64	30	6	7	32	61	72	23	5	84	14	2
B	188	78	20	2	2	12	86	79	18	3	3	16	81	37	53	10	3	37	60	60	36	4	10	47	43	67	30	3	85	12	3
C	104	68	30	2	-	14	86	75	24	1	5	18	77	41	52	7	3	35	62	48	36	14	15	36	49	69	27	4	80	17	3
D	171	75	22	3	-	12	88	64	31	5	2	27	71	25	65	10	3	40	57	42	47	11	15	54	53	41	6	81	17	2	
計	753	74.9	22.8	2.3	1.1	9.8	89.1	78.0	19.5	2.5	3.0	17.6	79.4	40.0	52.1	8.0	2.8	31.5	65.7	55.0	36.8	7.6	10.6	41.2	48.2	66.1	29.3	4.6	82.9	14.9	2.3
		n.s		P<0.05		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		P<0.01		n.s					

表30 大学のスポーツに対する態度（項目別）

比較対象		スポーツ動			スポーツ目的			スポーツ効果		
		上位群	中位群	下位群	上位群	中位群	下位群	上位群	中位群	下位群
		8 ~ 5	4 ~ 2	1 ~ -8	8 ~ 7	6 ~ 3	2 ~ -8	15 ~ 14	13 ~ 6	5 ~ -15
運動経験										
A	347	44.4	36.3	19.3	15.9	70.0	14.1	28.2	64.8	6.9
B	253	39.9	39.1	21.0	15.8	67.6	16.6	22.5	63.2	14.2
C	121	26.5	32.2	24.1	19.0	67.8	13.2	18.2	66.1	15.7
D	274	20.8	28.1	15.1	14.3	68.2	17.5	14.2	65.3	20.5
性別										
男	753	33.3	33.3	33.3	15.7	66.9	17.4	21.2	64.6	14.2
女	242	38.4	33.9	27.7	16.1	74.0	9.9	23.1	65.3	11.6
全体	995	34.6	33.5	32.0	15.8	68.6	15.6	21.7	64.7	13.6
運動経験：		P<0.01			n.s			P<0.01		
性別：		n.s			n.s			n.s		

が、これらの意見全体を、個人の態度尺度の平均からみると、顕著な差はみられず、わずかにAとD、すなわち運動経験の程度の両極においてのみ有意の差がみられるにすぎない。なお、この項目に対する個人の態度尺度の平均は、4.52（尺度の幅、8～-8）であり、かなり好意的である。

さらに、表29のスポーツの効果に関する15の意見に対する反応を、全体でみると、好意的反応の高い意見は、Q15「スポーツは体力を増強する」（賛成90.0%）、Q2「スポーツは健全な身体をつくらぬ」（反対89.1%）、Q10「スポーツは気分転換になる」（賛成82.9%）であり、好意的反応の低い意見はないが、好意的反応の占める割合が比較的低くて、中間的反応の高い意見は、Q5・7・8である。

これを運動経験との関連でみると、Q1・2・10・12・15を除いて、いずれも有意の差がみられる。

これを運動経験との関連でみると、Q1・2・10・12・15を除いて、いずれも有意の差がみられる。

(-15 ≤ score ≤ 15)

項目	11 スポーツは公正な人格を養成しない		12 スポーツは感覚を鋭敏にしない		13 スポーツは人間性を豊かにする		14 スポーツは交友関係を助長しない		15 スポーツは体力を増強する		尺度の平均値	標準偏差			
	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対					
3	24	73	3	16	81	77	22	1	1	18	81	94	5	11.05	3.35
7	38	55	8	21	71	69	28	3	2	20	78	87	13	9.77	4.06
8	25	67	4	29	67	70	22	8	3	27	70	89	10	9.65	4.22
6	41	53	7	22	71	59	34	7	5	32	63	87	12	8.50	4.41
5	33.1	53.2	5.3	20.5	74.2	69.9	26.3	3.9	2.4	22.7	74.9	90.0	9.2	9.96	4.03
	P<0.01		P<0.05		P<0.01		P<0.01		P<0.05		A>B=C>D		P<0.01		

また、この項目に対する個人の態度尺度の平均は、9.96（尺度の幅、15～-15）であり、スポーツの目的に対する態度同様かなり好意的である。運動経験との関連では、A>B=C>Dであり、AとB、CとDの間に有意の差がみとめられる。したがって、スポーツの効果に対する態度は、高校運動クラブ経験の有無と強い関連があるといえる。

以上、大学のスポーツに対する態度を、各意見に対する反応および各項目の個人の態度尺度の平均からみてきたわけであるが、表30は、項目別に個人の態度尺度を、上位群、中位群、下位群（尺度の幅は、表30参照）に分けて、運動経験

および性別との関連でみたものである。

表に示すとおり、大学のスポーツに対する3つの項目のうち、運動経験と有意の関連にあるものは、スポーツ活動とスポーツの効果に関するものであり、この2つの項目に対する学生の態度は、高校体育授業参加意欲および高校運動クラブ経験の有無と強い関連があるといえる。逆にスポーツの目的に対する態度と運動経験とは有意の差がみられない。

したがって、大学のスポーツ活動に関するような具体的で身近かな内容のもの、および、スポーツの効果に関するようなスポーツ体験が大きい意味をもつような内容のものについては、学生の態度は高校での運動経験をダイレクトに反映して関連が高く、逆にスポーツの目的に関するような抽象的な内容については、運動経験との関連は低いといえよう。

なお、性別による差異はほとんどみとめられない。

(5) まとめ

以上の結果を要約すると、つぎのようになる。

- ① 新入生のスポーツに対する愛好や意欲の程度は、高校での運動経験と強い関連があるが、これを全体で見れば、スポーツが好きで、大学でのスポーツ活動に意欲をもつものは、80%を越え、さらにスポーツ活動の基盤を運動クラブに志向しているものは、約65%である。
- ② 新入生が大学のスポーツに志向する要因は、運動志向、健康志向、レクリエーション志向によるものが多い。これを運動経験、とくに高校運動クラブ経験の有無との関連で見ると、経験者は、友人志向、技術志向が大学のスポーツに志向する主なる要因であるのに対し、未経験者の場合は、健康志向やレクリエーション志向が強い。また、運動クラブにスポーツ活動の基盤を求めるものについても、ほぼ同様の傾向がみられるが、運動経験の違いによって、大学のスポーツに志向する要因に差異がみられることが注目される。
- ③ 態度測定による新入生の大学スポーツに対する態度は、運動経験と関連があるが、全体的にかなり好意的であり、大学でのスポーツの価値を高く評価しているといえる。

Ⅲ、結 語

以上、きわめて大雑把に、新入生の高校での運動経験の実態を明らかにするとともに、それら運動経験と大学でのスポーツに対する態度との関連について考察してきた。それぞれの要約はすでに述べたので、ここでは、今回の調査結果をふまえて、今後に残された課題を素描することによって、結語にかえたいと思う。

新入生の高校での運動経験は高いとはいえないが、その原因は、新入生の運動欲求の低さにあるのではなく、現在の高校教育をとりまく諸情勢、とりわけ、大学入学制度の弊害が高校教育のなかで、一種の運動疎外状況をつくり出し、新入生がじゅうぶんな運動をするだけの時間的・精神的余裕をうばっていたからだとみてよいだろう。

問題は、このような状況下に置かれていた新入生に対して、大学の体育・スポーツが、どのように機能すべきかを検討することに集約されよう。

新入生の大学でのスポーツ意欲は強いし、積極的にその基盤を運動クラブに求めるものも多いが、現実には、大学のスポーツは特定の学生の占有物となって、一般学生の多くはその埒外に置かれている。その背景には複雑な要因が存在していると思われるが、そのひとつを、今回の調査結果から仮説的に指摘すれば、伝統的な勝利至上主義にもとづく競技志向性の強い既存運動クラブが、楽しみのあるいは健康の維持・増進というレベルでスポーツを志向する学生のクラブ参加意欲を阻害しているのではないかと思われる。もしそうであるなら、既存運動クラブの凋落のなかで、楽しみを主目的とする運動同好会が急激に増加していることの背景を解明する糸口は、このあたりにありそうである。

いづれにしても、大学の数少ない運動施設を、なかば占拠してスポーツに没頭する学生がある一方では、強い運動欲求をもちながら、その欲求を充足させえない学生が数多く存在している事実を直視しなければならない。

今後は、このような状況を生起させている諸条件を明らかにするとともに、大学でのスポーツ活動を規定する要因を、さらに綿密な調査・研究によって究明する必要がある。と同時に、学生のスポーツ欲求を、大学がどう受けとめ、どのような形でスポーツ活動を保障するかという課題にも積極的に取り組まなければなるまい。

付記：本稿は、東海地区大学保健体育研究会が、昭和42・43年度に行なった「大学における増健活動の推移とその発展に関する総合的研究」の一部である。本稿を作成するにあたっては、共同研究者であった愛知県教育委員会藤瀬兼男（元本学教官）、名古屋大学中島豊雄、両氏のご教示を受けた。ここに感謝の意を表する。

引用および参考文献

1. 徳永幹男「九州大学学生の体育実技に対する態度測定」 体育学研究 10-1. 1965
2. 小林・徳永・桑野「大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究」 九州大学 体育学研究
3. 九州地区体育社会学研究会「大学における体育・スポーツの社会学的研究」 1967
4. 中島・寺沢・西垣「学校体育と社会体育の接点に関する社会学的研究」 日本体育学会20回大会発表資料 1969

5. 文部省「青少年の健康と体力」—41年度— P85~87
6. 文部省体育局が昭和39年以来スポーツ・テストを全国的に実施してその結果を報告している。
7. 大学基準協会「大学基準協会会報」 第3号 1952（海後宗田監修「戦後日本の教育改革」 第7巻 P510）
8. 石橋保「大学における運動クラブの現状と問題」 体育の科学 1968・3
9. 岡はこのことについて 「昭和42年度に早稲田大学では、スポーツ同好会員数は運動クラブ員の約3倍強である」と報告している（岡三郎「大学におけるスポーツ同好会の現状とその問題点」 体育の科学 1968・3）
10. 影山健「クラブ活動はどこへ行くのか」 体育科教育 1970・5

その他

永井道雄「日本の大学」 中央公論社

竹之下休蔵「体育50年」 時事通信社

文部省「高等学校学習指導要領」 保健体育編 開隆堂